
素晴らしきこの日常

神山 まやみか

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

素晴らしきこの日常

【Nコード】

N3587S

【作者名】

神山 まやみか

【あらすじ】

日常に溢れていることを短く、そして楽しく書いて行きます。

そして、最後の結末……

暗記

僕は現在極限状態に置かれていた。

僕はこれから、たったの五分程度の時間内にこの八種類のマーク（全五十個近い数）を覚えなくてはいけない。覚えなかつたら即効病院行きだ。

そもそも、僕にこのテストは向いていない。こんなテストは産まれ持った持ち主と持っていない者に分かれるからだ。

僕はたぶん、最初は持っていた。だが、ある日から失った。何が原因なのかもわからない。だって気づいていたら、こんなことにならなかつたはずだ。

それでも僕自身、このテストはあまり嫌いではなかつた。僕が嫌っているのはこのテストを受けた後に帰ってくる、謎の紙だ。

そう、数字やマークが書かれた長方形の白い紙。

そんなことを考えていると、自分の番が近付いてきた。

やばい……、こんなことを考えていたせいか、まだ半分すら覚えてない。

このままでは病院行き、さらには顔面に器具をつけられてしまう。

次から次へと、前の人が抜けていき自分の番に近づく。

抜けていく人の、顔を笑顔に溢れている人もいれば、落ち込んだ暗い表情の人もいた。

そして、僕の番が来る。

心臓がバクバクと鳴り、血圧が高まり、右の視界が塞がれ見えなくなつた。

くそっ！ こうなつたら例年通り勘で勝負だ！

そうして、試験が出した的を凝視して集中力を高める。

あの光つたやつが的なんだな。当ててやる！

「斜め右上！ と見せかけての左下ですね！」

二分後

「はい、ありがとうございます。それじゃあ石渡君、視力Dね」

その一言で僕の最後の危機は最悪の結果となり終わった。

後日。僕は謎の数字や英語の書かれた紙を先生から受け取り、それを親に提出すると代わりに眼鏡が贈呈された。

暗記 (後書き)

どうでした？

全話、こんな感じなので、しかも最後繋がっているので十分程度全
て読めると思います。

クライマックスがウリです。

彼氏彼女のいらないと思う考え方(前書き)

僕は結構こういふことを口頃から考えちゃっています。

彼氏彼女のいらないと思う考え方

だいたいいつ頃からだろうか？

早い人は小学生、遅くても高校生、まあ、その程度だと思うんだ。彼氏や彼女を作ったり周りが異性と付き合いだすのは。

そこで、僕はいつもこう思ってしまうんだ。

よく、周りの友達に彼氏や彼女ができたから私も欲しいって言う人はいるけれど、最終的に別れるんだぞ？ と。

だって実際にそうだろ？ 例えば自分の親や祖父母が同じ年の人はいるか？ 否。

もしいたとして、じゃあそこで同じ学校だったのか？ と訊かれればそれは限りなく0に近いだろう。

でも、これはあくまでも僕の推測だ。なので、アメリカの某有名大学の調査結果を元に調べてみた結果。

同い年で結婚した人は、既婚者から割り出すと5%にも満たない。そして、同じ学校で結婚した人は、なんと1%にも満たないということが分かった。

つまり、ほぼ100パーセント学生時代に付き合い合ったって無駄だということがわかった。

そう考えていくと、本当に恋愛は無駄だと思えてくる。

それでも、やっぱりその時その子が好きだから付き合いたいと思う人も大勢いると思う。

でも、それは逆に考えると付き合いってしまうと、その好きなこ

といつか別れが来てしまうことにも繋がる。

そこで理解しても尚、100パーセント別れると決まったわけじゃないと言い、異性と付き合う人がいる。だから僕は、必ずそういう人にこう言う。

「がんばれよ」

そう、そんなチャレンジャーがこの世には溢れんばかりにいる。それはもう身近にわんさかと。だから、僕はこんな世界が好きだ。こんな人たちが好きだ。

彼氏彼女のいらないと思う考え方（後書き）

どうでしたでしょうか？ 僕はそれを理解して尚、結婚まで行く自身がないので二十歳過ぎぐらいまでは恋愛に興味がないですけど。

もし、これを読んで少しでも気持ちが変わった人は、彼氏や彼女に「愛しているよ」と一言でも二言でも言ってみてはいかががでしょうか？

ありがとう死神よ

「私の命はあと三日なのよ」と妹は弱々しく言った。

私は、何も言わずに妹を抱きしめた。

妹は癌を患わっていた。幾度かの手術にもう妹の体力は限界に近かった。手術はもう無理だと医者に言われた。妻が日に日に哀えていくのがわかった。

そんなある日、私が見舞いに行くと、

「今日、死神が来たの」青白い顔に浮かぶ桃色の唇を震わせながら妹は言った。

訝しげな顔をする私に、

「私の命はあと三日なのよ」と妹は言った。

私は、何も言わずに妹を抱きしめた。しばらくそのままお互いの温もりを確かめ合うように……。

その日は、病院で妹と遊んだ頃の思い出を語り明かした。

次の日、「流れ星が見たい」と妹が言うので、朝一番に退院して今はもう誰も住まない昔住んでいた団地に帰る事にした。私が運転する車で揺られるあいだ、妹は具合が悪いにも係わらず、顔色変えず耐えていたのであろう。途中休んでは運転して、休んでは運転して、団地に着く頃には日も暮れかかっていた。

夜の帳が下りた後、小川の辺りの茂みに二人で座って、空を見上げると都会では見られない洗練された星々が見えた。

「折角の流れ星が涙で見えない」と妹は笑って言った。私は、ハン

カチでそつと妹の目頭押えてあげた。

「明日は、何がした？」私は妹に問う。

「明日は、お兄ちゃんの笑顔を見ていた」と妹は、答えた。

次の日、私は出来るだけの笑顔でいた。妹と料理を作ったり、テレビを見たりして笑顔を絶やさないようにした。

夜、寢床に着くと、私は妹と手を繋いで寝ることにした。

「明日は、何がしたい？」私は、妹に問う。

「明日も、このまま離さないで下さい」と妹は答えた。

そして次の日、私と手を繋いだまま妹は逝った。

「ありがとう。お兄ちゃん」

私は、妹が笑顔のまま目を閉じていくのを見守った。そしてしばらくそのままでいた。

いつしか妹の手からは温もりが無くなっていた。固くなって動かない妹の手を離すと独り呟いた。

「死神よ」静寂の中、黒い影の形をしたものが現れた。

「私にはもう思い残すことは無い」

「お前の命は、あと一日ある……」

「いいんだ、死神よ。私にはもう思い残すことは無い。妹があんなに良い笑顔で天国に逝ったのだから」

「……」影は何も答えない。

「私は、お前に感謝をしている。妹よりも一日でも遅く私を迎えに来てくれたのだから」

私の所にも、死の宣告を告げる使者が来ようとは思いませんでした。

しかし、私は妹の死さえ看取ればそれでいい。

だから

「ありがとう死神よ」

初めての（／／／／／

今日から私こと中村奈津美はデビューをするのだ。

初めての　　ってのは今までいろいろやってきたが今回は特別に違う。

なぜなら自分の体の一部を売るようなものなのだから……。

時間がきた。

私は服を脱ぎ真っ裸になる。

そして、お風呂場に行く前に無駄かもしれないが、自分のやる前とやった後の違いはどの程度なのか確認するため鏡で全身を写す。

でも、いつまでも縋っていたら駄目だ。

これは大人になると言ったら変化もしれないが、ほとんどの人が経験することなのだから。

そして何よりも自分が求めているのだから。

決意を決めてお風呂場に入る。

お風呂場では先っちょの黒い棒状のようなものが待っていた。

私は、それを見るのは初めてでもちろん扱い方など知らないの戸惑ってしまった。だけど、この形状からして先っちょの部分から何か出てくるのだろうかとは予想できた。

その棒状のようなものを私は、握り、思いつきりふり、くちやくちやくといやらしい音を立てた。

すると、案の定黒い部分から白いどろっとしたような液体が出て

きた。

その液体は、前後に振るたびに私の髪や顔、肩に着いた。

私は、いろいろなことに驚いたが、何よりも驚いたのは臭いだ。
この何とも言えない臭いがすごく鼻についた。

みんなはこんな臭い思いをして変わって行くのか、なら私は変わらなくて良かったかも……。

なんてもう、後戻りのできないことを悔む。

三十分後

「うん、すごくきれいに染まったわ。ちょっと思った以上の臭さだったけど、これぐらい我慢しないとね」

お風呂場から出た自分の姿は、黒髪から金髪へと変わっていた。

最終章

十年後の僕たち

俺たちはいつの間にか気づけば大人になっていた。

時が流れるのは非常に早く、それはお年寄りがよく口に言うように中学生時代が昨日のことのようだ。

俺たちはいつも四人でいた。

何をするのも一緒、どこにも行くのも一緒、それはよく言う親友というやつだ。

俺はずっとこのまま四人でいると思っていた。

だが、運命は残酷にも俺達を別々の高校に行かせた。

「うおっ！ 浅里っ！ なぜここにっ！」

十年後俺たちは母校の中学校で集合した。

それは、打ち合わせや約束などしていなく、僕たちは黒い影に誘われてここまでやってきた。

浅里とは八年ぶりくらいに顔を合わせたか、その顔は僕の知っている顔ではなくガリガリに痩せ細って青ざめた顔だった。

「……おっ、白鳥。久しぶりだな」

浅里は無理に笑顔を浮かべて言った。

「で、そっちにいるのは 石渡？」

「気づくの遅えーよ！ だいぶ待っちゃったじゃねーか！」

石渡は相変わらず、変わったところはなかった。

だが、眼鏡をしていたので少し誰だかわからなかったのだ。

「おう、ちょっと高校で視力検査がな……」

石渡はそこまで言うと言葉を濁らせた。たぶん、あの変な紙をもらって代わりに眼鏡が贈呈されたってところだろう。

「で、私の出番はまだかしら？」

俺達が昔の思いで話をしていると、一人の金髪女性が声をかけてきた。

「あのお……どちら様でしょうか……」

俺が代表して女性に質問をする。

「私よ！ わ・た・しっ！ 中村奈津美よっ！」

「えっ、ああ！ 中村！？ 中村なのか！ 金髪になっていたから気づかなかったよぉ」

それは、同級生だった中村奈津美だった。

俺が知っていた中村は黒髪だったので、まったく気付かなかった。

それから僕たちは、場所を移動して、昔よく遊んだことや、これまでの経験、今何をやってどうなっているのか、歌い、騒ぎ、まるで外見は変わっても中はまるで中学生のままのような時間が流れた。

「で、中村結婚したの？ 相手誰よ？」

「もちろん相手は長谷川くんよ。子供も二人いるの」

長谷川くん……長谷川君……。

「もしかして、あの当時中村が付き合っていた長谷川か!？」

「うん 白鳥が、がんばれよって言うてくれたからゴールインしちゃいましたあゝ」

ま、まさか、本当にゴールするとは……。

そんなこんな話もしてそろそろお別れの時間がきた。それは中学生から大人に戻る一瞬の間

「それじゃあ、今度いつ会おうつかあゝ」

石渡がそんなことを酔っ払いながら言う。

「……ごめん、僕は明日妹がむかえにきて当分会えそうにない……」

「おいおい、なんだよお、そんな左下を見て、どんな時も右上を見ていこうぜえゝ」

「ごめん、私もういいや。いつまでも過去を引きずってちゃいけないからね。今日は本当に楽しかった! ありがとう!」

中村は俺たちみんなに握手をしてお店を出ていく。店内が暗かったせいか、お店を出た中村はそれまで全然気にならなかつた髪が妙に金髪に見えて、その姿は大人そのものだった。

「……それじゃあ、僕も……これで……」

浅里もそれぞれに握手をしてお店から出ていく。
それは中村が残っていた金髪の力が発揮したのか、浅里の出てあとの店内は妙に明るかった。

「また、俺達残ったな……」

「だな……」

「でも、俺達もそろそろ前に進まなきゃ」

「……おう！」

そう言った石渡の笑顔を昔から何も変わっていなかった。
こうして僕たちは前に進んだ。

何年経とうと、どこにいようと僕たち四人は変わらないと確信して

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3587s/>

素晴らしきこの日常

2011年10月8日21時08分発行